モニタリングサイト1000
Since 2003

2026年度 干潟 Tidal Flats

モニタリングサイト1000調査速報

はじめに

我が国の沿岸域は、磯、干潟、アマモ場、藻場及びサンゴ礁に代表される生物多様性の高い貴重な生態系を有しています。

私たちは、これらの生態系から魚介類や海藻などの食料を得るとともに、潮干狩りや観察会などの余暇や教育活動の場としても利用しています。また、これら沿岸域生態系の機能（水質の浄化、台風等による高波を防ぐ作用、二酸化炭素を吸収する働きなど）は、私たちの生活に様々な恩恵をもたらしてくれます。

「干潟」とは？

砂泥質の遠浅な海岸であり、内湾や河口域などの波の穏やかな潮間帯に形成される平らな地形を示します。 干潟は多くの底生生物が暮らす場であるだけでなく、潮の満ち引きがあるため、干潮時には鳥類（シギ・チドリなど）のえさ場、冠水時には稚仔魚（ちしぎょ）のえさ場や生育場として、様々な生物に利用されます。また、陸水域から流入する有機物等を生物が利用するため、干潟には水質を浄化する作用などもあります。

永浦干潟サイト（熊本県）



ハクセンシオマネキ

中津干潟サイト（大分県）



カワアイ（左）とヘナタリ（右）

干潟調査

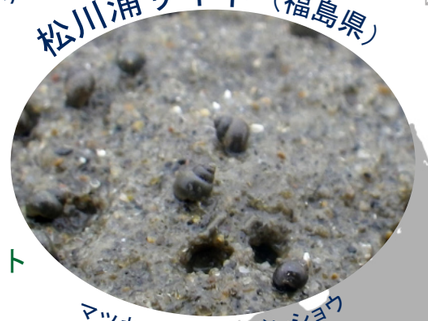
2008年度から「毎年調査」と「5年毎調査」の２つの調査により、各サイトの複数エリアで底生動物（貝・カニ・ゴカイの仲間など）の群集組成を調べることで干潟の長期変化をとらえ、自然環境保全のための基礎情報を得ています。

2026年度の調査では、日本沿岸の8箇所のコアサイトと2箇所の協力サイトで、19度目（協力サイトは11度目）となる毎年調査を実施し、干潟表面や底土中に生息する動物の種類や数を調べます。

速報掲載更新履歴

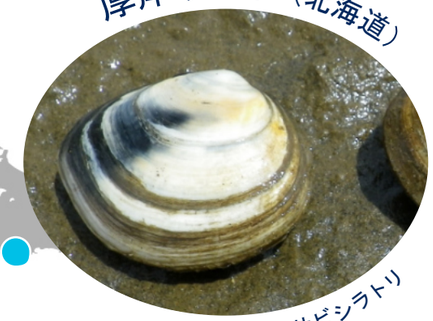
☑ 2026. 10. 30	松川浦サイト	▶ Link
☑ Coming Soon	厚岸サイト	▶ Link
☑ Coming Soon	盤洲干潟サイト	▶ Link
☑ Coming Soon	汐川干潟サイト	▶ Link
☑ Coming Soon	南紀田辺サイト	▶ Link
☑ Coming Soon	中津干潟サイト	▶ Link
☑ Coming Soon	永浦干潟サイト	▶ Link
☑ Coming Soon	石垣川平湾サイト	▶ Link
☑ Coming Soon	松名瀬干潟サイト	▶ Link
☑ Coming Soon	英虞湾サイト	▶ Link

松川浦サイト（福島県）



マツカワウラカワザンショウ

厚岸サイト（北海道）



サビシラトリ

松名瀬干潟サイト（三重県）



オカミミガイ

盤洲干潟サイト（千葉県）



クシテガニ

汐川干潟サイト（愛知県）



ウミニナ

英虞湾サイト（三重県）

南紀田辺サイト（和歌山県）



コゲツノブエ

石垣川平湾サイト（沖縄県）



ルリマダラシオマネキ

イボウミニナ



● コアサイト
● 協力サイト

参考情報

- ☑ モニタリングサイト1000干潟調査の調査項目と内容 ▶ Link
- ☑ 2025年度モニタリングサイト1000 干潟調査速報 ▶ Link
- ☑ 2025年度モニタリングサイト1000 磯・干潟 調査報告書 ▶ Link
- ☑ モニタリングサイト1000沿岸域調査 磯・干潟・アマモ場・藻場 2008-2022年度とりまとめ報告書 ▶ Link

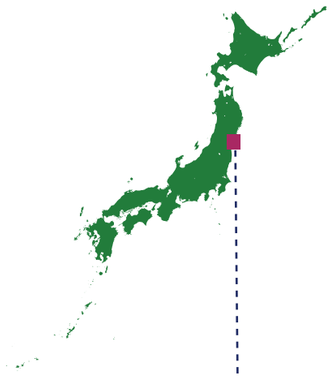
環境省 自然環境局 生物多様性センター Biodiversity Center of Japan
Wetlands INTERNATIONAL

モニタリングサイト1000　環境省 自然環境局 生物多様性センター Biodiversity Center of Japan　Wetlands INTERNATIONAL

まつかわうら

松川浦サイト

- 福島県相馬市 -

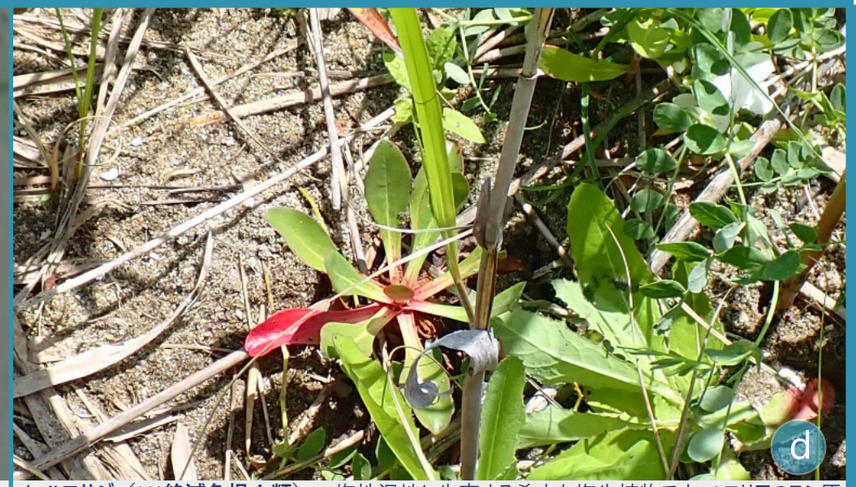


- 仙台湾の南端に位置し、砂洲（さす）によって太平洋と隔てられた南北に長い潟湖であり、東北地方最大級の干潟です。松川浦県立自然公園に指定されている場所です。
- 多くの場所で岸辺は護岸されており、ヨシ原のようなエコトーン（移行帯）が見られる場所は限定されています。
- 2エリア（A・B）で、2つずつのポイントを設けて調査を実施しています。
- 東北地方太平洋沖地震に伴い発生した津波の影響を受けました。





▲ **カワアイ（*絶滅危惧Ⅱ類、***絶滅危惧Ⅰ類）**：本種は震災後からほとんど確認されませんでしたが、今年度の調査では、Bエリアで多くの個体を確認することが出来ました。大部分が殻の摩耗していない加入から数年程の成貝でしたが、前年度の調査時までは生息個体が確認されませんでした。近傍の個体群から成貝が移動してきた可能性も考えられます。



▲ **ハマサジ（***絶滅危惧Ⅰ類）**：塩性湿地に生育する希少な塩生植物です。Aエリアのヨシ原内にマルミノシバナやハママツナともに生育しています。震災で出来た空き地（ギャップ）を生息場として利用していましたが、ここ数年でヨシ原が拡大・回復したことで、徐々に生息範囲が狭くなっています。ヨシとの間に空間（光）をめぐる競争関係があると考えられます。

調査結果概要

太平洋との通水路付近に位置するAエリア（写真a）では、干潟表面に巻貝のマツカワウラカワザンショウ（*絶滅危惧Ⅱ類）とホソウミニナ（共に写真c）が、極めて高密度に生息していました。潮上帯のヨシ原では、希少な微小巻貝であるクリイロカワザンショウとヨシダカワザンショウが確認されました。また、近年、松川浦干潟で記録の無かったドチクチユムシ属の一種が採取されました。さらに、南方系種であるオサガニも確認されました。

松川浦の南側最奥部に位置するBエリアでは、ホソウミニナとマツカワウラカワザンショウ（共に写真c）、ヨコエビ類のニホンドロソコエビや二枚貝のオキシジミが多く見られました。外来種であるカニヤドリカンザシは、今年度も干潟上に点在する貝殻等付着基質や転石帯で確認されました。また、2024年度と前年度にBエリアで確認されたオサガニは確認出来ませんでした。

注目すべき点として、東日本大震災後に松川浦干潟でほとんど生息が確認されていなかった希少な巻貝のカワアイ（*絶滅危惧Ⅱ類、***絶滅危惧Ⅰ類;写真b）が、複数個体確認されました。Bエリア全体では、殻が摩耗していない本種の成貝がおそらく数百個体以上生息していると推定されました。今後も本種の個体群の動向を注視していく必要があります。なお、近傍の海域では、宮城県の松島湾に本種の健全な個体群が確認されています。



▲ **ツバサゴカイ（**絶滅危惧ⅠB類）の棲管**：長さ1m以上にもなるU字型の棲管を作ります。写真の干潟上に突き出している管が、本種の棲管の両端部です。また、掘り上げた棲管内からは、本種やフサゴカイ類に共生する希少なカニ類が見つかりました。



▲ **Aエリア全景**：写真の手前がAエリアの潮間帯上部の調査ポイントです。潮間帯上部の調査ポイントの奥に見える歩道橋の右側奥が潮間帯下部の調査ポイントです。



▲ **マツカワウラカワザンショウ（*絶滅危惧Ⅱ類）**：Aエリアの干潟表面に多産していました。殻長数ミリの小さな巻貝ですが、松川浦では1m²あたりに数千個体も出現することがあります。写真奥の大型で細長い殻の巻貝はホソウミニナです。



▲ **ニオガイ**：軟らかい泥岩に穴を穿って暮らす二枚貝です。Aエリアの干潟上にはニオガイの生息に適した泥岩が点在しています。

調査日 2026. 6. 18 - 19

サイト代表者：金谷　弦
（国立環境研究所）

調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】
金谷　弦（国立環境研究所）【a-f】
柚原　剛（国立環境研究所）
鈴木孝男（みちのくベントス研究所）
多留聖典（東邦大学）
阿部博和（石巻専修大学）
海上智央（自然教育研究センター）
福村龍星（東邦大）
村上純一（福島県在住）
青木美鈴（WIJ）
大見川遥・小田晴翔・
高橋陽大・甲地由樹・
大友　塁・小野由護・
高橋康太・二階堂優和・
服部陽菜（石巻専修大学）

*　環境省レッドリスト2020、　**　環境省版海洋生物レッドリスト、
***　ふくしまレッドリスト2024　を参照

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。

出典：モニタリングサイト 1000　2026年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2026.pdf)

これまでの干潟調査の報告書はこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html
これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html